

# 「天下第一関」について

大場仁史

日記より

平成3年(1991年)

1月18日 旧奉安殿の扉を開く  
傷んだ「天下第一関」を発見する

12月12日 役員会

西高にとって記念すべきものなので、是非修復して保存して欲しいと提案する。

70周年の記念事業としては少し時期が遅いが、70周年の一環として修復することが承認される。

(修復費用について電話で問い合わせると・・・硯山 10万円)

平成4年(1992年)

2月20日 三輪雲輪軒に電話  
和田先生談 雨天体操場入り口の上側に掲額

27日 三輪雲輪軒の方が来校、現物を見てもらう

3月11日 三輪雲輪軒より電話 約110万円

3月26日 役員会にて「天下第一関」の扁額修復の件 了承される

合わせて、「各部対抗リレー優勝旗」も新たに作成、寄贈することを決定

4月16日 常任委員会にて扁額設置場所を玄関ホールに決定(校長同席)

4月18日 三輪雲輪軒に正式依頼  
三輪雲輪軒より引き取り

6月18日 扁額修復終了。玄関ホールに掲額設置

7月31日 牧先生に電話 8月11日来校

8月11日 牧先生来校 10時から13時半

「天下第一関」にまつわる話を伺う

平成六年六月に簡単な説明文のプレートを設置する

平成6年(1994年) 旭陵同窓会誌 「天下第一関」(大場仁史)掲載

8月22日 好川先生写真 孟姜女廟の石刻の「天下第一関」

平成7年2月20日 山西克之輔(39期)氏より

「肖顕」の写真とタバコ「天下第一関」

平成11年8月25日～29日 80周年記念「天下第一関ツアー」 拓本受領

平成27年2月28日 説明文プレート付け替え設置

西高ホームページ上に掲載

## 旭陵「天下第一關」の歴史

現在の山口県立下関西高等学校は、大正九年四月十五日に下関市王司町(下関市旧保健所当たり)の下関市立文関小学校跡に「下関市立下関中学校」(通称『関中』)として開校以来、大正十二年に後田町長六(現下関南高)に新校舎落成、山口県に移管、「山口県立下関中学校」と改称。昭和五年三月に現在地に新校舎竣工、移転となって現在に至る。



山海関の楼門と扁額 「天下第一關ツアー」のときに撮影(大場)

### (一) 「天下第一關」の始まり

旭陵の「天下第一關」についてが一番古い記録は設置直後の次の一文である。校内にこれに関わる文献があるはずだと考え、資料室にある物と言えば同窓会誌と卒業アルバムそれに教務日誌などが主なものである。それこそ片っ端から見ていくうちに、やっと探し当てた資料である。

同窓会誌 第8号 (昭和十一年七月) 旭陵通信 會長 香川静爾

生徒控所の出口の上に豎六尺横二十一尺の大額を掲げ候。是は御承知の萬里の長城の起點たる山海關の樓門上に掲げありし額面の拓本に有之、關門日日新聞の加藤主筆の寄贈にかゝるもの、外枠は是亦生徒の製作にて文句は「天下第一關」蓋し將來の關中の發展を暗示するものゝ様におぼえ候。只目下の處大分向上は致居候ものの、生徒の向學心まだまだ薄く今一步と云う處に彷徨致居候事小生等の關心事是のみと申して差支へ無之候。(関連部分のみ抜粋)

香川静爾(第四代校長、昭和六年五月三十日から昭和十八年五月十五日)

これに続く記述は、戦後の「憶い出」であり、製作過程と設置場所が具体的に記載されている。

旭陵同窓会誌 1956 (昭和三十一年二月二十六日) 憶い出 香川静爾

只記事の最後には是非此處に述べて置度いことは今や過去の關中以来現在の下関西高時代を通じて、生徒諸君がモットーとしシンボルとして叫ぶ講堂直下に掲げある「天下第一關」の大幅に就いてである。是は昭和十一年頃と思うがその当時下関で発行されて居た關門日日新聞主筆加藤七五郎氏が全国新聞記者団に加わって支那視察をした節入手した万里長城の最東

端にある山海関の樓門上の扁額の拓本で、余りに大きなものでもて余して居られて偶々關中卒業式参列の際話がこの事に及んで、その語呂合が今や旭の如く進展向上せんとしつゝある關中としてうってつけと思い、早速是を貰い受けて第一種課程生徒の工作実習として作ったものが即ち之れなのである。爾来私を初め在校職員一同口ぐせのように常に「天下第一關」を目指して云々と呼号したことが遂に生徒諸君の共鳴を得た訳合いである。（関連部分のみ抜粋、原文のまま）

註 1931年（昭和6年）1月10日 - 中学校令施行規則の改正により、上級学年（3年以上）で第一種・第二種課程を編成し、どちらかを選修させる方式を採用。

**第一種課程 - 卒業後すぐに就職する者を対象に実業・理科を中心に教授。**

關中では、商業、工業、農業が教えられていた。旧校舎のときには、木工室や図書館の横には温室があった。

**第二種課程 - 上級学校に進学する者を対象に外国語・数学を中心に教授。**

以来、「天下第一の關中たれ」という願いとともに「中等教育は人生第一の難関、これを克服せよ」との意味も併せてこのことばを校是としている。

現在であれば、写真が残されていて当然であるが、「關中」のすぐ上には下関要塞司令部が置かれていて、写真機を掲げていようものならたちまち憲兵に引っ張られてしまうことだろうから残されていないのだろう。旭陵同窓会誌の写真でさえ「下関要塞司令部検閲済み」と書かれている。従って、現存する本校に残る最古の『天下第一關』は昭和十二年三月八日発行の旭陵である。



上段の扁額は山海関を起點とする萬里の長城の樓門にかゝつてゐるものを複寫したのです。縦一間横三間半豪勢な額です。是は關門日日新聞主筆加藤七五郎氏が滿州視察のお土産として本校に下さったものです。（原文のまま。右書き）

さらに「旭陵同窓会史」1956年（昭和31年）の6ページの上に「天下第一關」が載せられている。誰が複写したかは不明。

（註）平成6年の牧先生の回顧談によると、**原本は拓本といわれるだけに、黒地に白抜き文字だった**ということだけれど、複写は普通の書き方で表したのだろう。

（註）下関要塞司令部が置かれていた跡には「忠霊塔」が建っている。子どもの頃は格好の遊び場であったが、当時はまだ赤煉瓦の防空壕が残っており、東側のいくつかの防空壕の出口の広場では時折警察の射撃訓練が行われていた。今はそれらの戦争遺構は全てなくなり「戦場ヶ原公園」として整備され桜の名所となっている。

旭陵史より 「天下第一関」に関する記述は以下の内容だけである。

「六月最初の日曜日、国漢のロングこと河村善也が、登校していた生徒たちを指図して、生徒控所正面入口の上の壁の「天下第一関」の額を架けた。たて六尺(一、八メートル)横二十一尺(六、三メートル)もある大きなものだった。」 P 228

途中 略

(この額もその後傷みがひどくなり、倉庫にしまいこまれたが、昭和四十年ごろ心ない生徒によって完全に損傷を蒙った。その前昭和二十四年秋、文化祭で関中、西高の古い資料や遺品の展示が企画された際、書道の牧教諭が、交友会誌に掲載されていた「天下第一関」の扁額の写真をもとに、その文字を縮小模写し、表装して出品した。山本重治校長の時代である。時移って平成四年に至り、この牧秀雄の縮小「天下第一関」を、仙崎の表具師三輪善一氏に依頼して、新たに表装しなおされた額が、いま西校新校舎玄関ホールの右手の壁にかけてられている。なお青木英一校長の昭和四十五年九月、創立五十周年を記念して、当時下関南高等学校書道を教えていた牧秀雄に頼んで、「天下第一関」をふたたび縮小模写して対屏風に仕立てたことがあるという)

年表によると

昭和十一年六月 P 712

- 六月 ・五～十五 四年生第三回鮮満修学旅行
- ・(日付なしで)「天下第一関」掲額
- ・十九 皆既食

昭和四十五年十一月 「天下第一関」対屏風に作製 P 771

(註 P 228とP 712とでは日付に相違がみられる。P 712では、その間の十六日から十八日の間と推測できるが、P 228の記述とは矛盾する。また、対屏風作製の月も異なる。この他に、牧先生のお話とはいくつかの相違点(牧先生の発案ではない。校長のの依頼とは言われなかった。)が見受けられる。

『傷みがひどくなり、倉庫にしまいこまれた』とあるが、これはキジア台風の被害でかなりの部分が失われている。それに『倉庫にしまわれた』ものに、損傷のしようがない。

『表装して出品』とあるが、表装は文化祭終了後である。『昭和二十四年秋』と『山本重治校長の時代』とは明らかに一致しない。『扁額の写真』ではなく複製と表記されている。)

## (二) 台風による破損、新たな「天下第一関」の作成

当初、扁額「天下第一関」は校舎の中心に建っていた二階建ての建物(一階は雨天体操場、二階は講堂で西日本では初めての頑丈なコンクリート造りであった)の運動場に向かって開かれた一階雨天体操場出入り口の上に掲げられていた。この出入り口からコンクリートのたたきがありアーチ形の建物の出入り口があるが、ここには扉はなく扁額は外風にさらされることになり、昭和二十五年九月十三日下関地方を直撃したキジア台風により一部は吹き飛ばされてしまった。その

後は扁額を受けていた頑丈な下支えの鈎だけがこの建物が解体されるまでずっと壁に残っていた。

天下第一關の扁額については、ロビーに掲額したのを機に牧先生に平成四年八月十一日御来校いただき、これにまつわる様々な話をお聞きすることができた。

7月31日 牧先生に電話 8月11日来校

8月11日 牧先生来校 10時から13時半

以下、牧先生談。(平成四年八月)

「私の着任は昭和二十四年九月三十日付け。この年は創立三十周年に当たり、記念日を十月六日に控えていた。折しも書道の先生の着任ということで非常に多忙だった。この間に石谷事務長が、金庫から出して見せてくれた物が、『天下第一關』の拓本の三分の一程度残ったものであった。石谷事務長の話では『旧体のグランド側に掲げてあったが、台風によりバラバラになりあちこちに飛んでいったものを拾い集めてこれだけ』」とのことであった。

この後、「拓本」と香川静爾校長が書き残しているのも、拓本ならば通常黒地に白抜き文字になっているはずではないでしょうかとおたずねすると、

「蟬翼拓本といって、文字の形をえどっておいて、その後墨で塗る方法がある」と教えていただいたが、「見せられた原本は黒地に白抜き文字だった」とのこと、これなら一般的な拓本である。

(註) 台風とは「キジア台風」

「時は下り創立四十周年にあたる昭和三十四年十月二日の文化祭において社会研究クラブ(ただし、学校要覧、各期の卒業アルバムや校内新聞にはその名は確認できなかった)が『関中、西高に伝えられたものや思い出の品を展示したい。この中に是非《天下第一關》を加えたい』との申し出があり、やむを得ず引き受けることにした。残された資料旭陵『(昭和十二年三月発行第八号)または一九五六年(昭和三十一年発行)』(この二冊以外には資料は残っていない)をもとに字の輪郭を模写し生徒たちがそれぞれに擦った墨汁を集めて一斉に墨をのせて『天下第一關』を再現し展示した。展示後は処分される運命にあったが、第十代山本重治校長が、『こんな力作を捨ててどうする』ということで、これを扁額にして今度は傷まないように二階講堂内の出入り口上に掲げられた。表装は大坪町の表具店だったと思う。」

原本はほぼ前出の大きさで、これを実物大の大ききまでに拡大することは、かなりの困難があったと推測せざるを得ない。牧先生は授業で「臨書の練習をするときは長さや角度も測って書くこともしている。ガラスを置いて下から電灯で照らして書くこともある」とおっしゃっておられた。楼門上に掲げられた扁額の文字とくらべても遜色ないのは恐るべき事であると思う。

これで風雨による被害は避けられることになった。しかし、不思議なことに、この表装額の写真もまったく残っていない。ただ、創立四十周年記念特集号に「天下第一關」が掲載されたのみである。

大坪町には中野表具店だけだったので、早速店に問い合わせたけれど、もう記録は残っていないということだった。



創立四十周年記念特集号に掲載された「天下第一関」

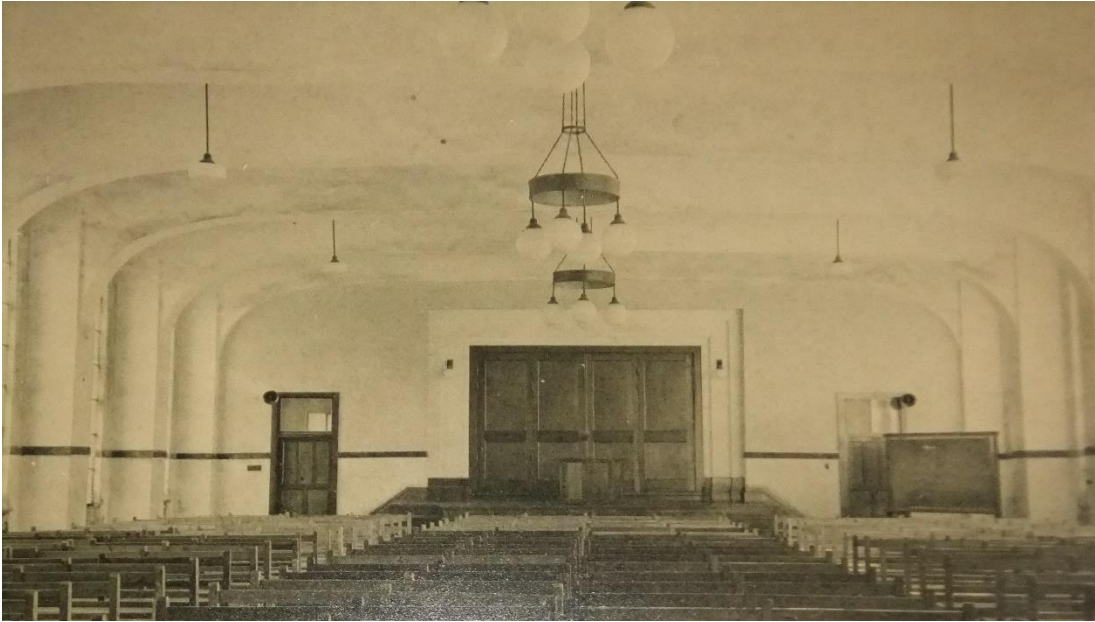
◎ 昭和三十六年度 学校要覧(会社概要のようなもの)に初めて題字として「天下第一関」が掲載され、以後必ず掲載されている。山口県内だけでなく全国でもこのような内容が書かれた「学校要覧」は見られない。

### (三) 扁額の破損

その後、昭和四十年代の大学紛争は一部高等学校にもおよび本校でもこれまでの権威に反抗する一部生徒たちによって昭和四十一年の体育大会の前後に朱墨等で塗られたため、破損著しくやむなく旧講堂の壇上奥、戦前は御真影が掲げられていた旧奉安殿内にしまわれた。第十一代弘津徹也校長(昭和三十七年四月から昭和四十五年三月)が激怒された(池永先生談)というが、事実は不明のままであった。



平成3年旧奉安殿内からとりだしたときの写真(大場撮影)



旧講堂奥の扉が旧奉安殿(この中に破損した「天下第一關」が収納されていた)

#### (四) 屏風の作成

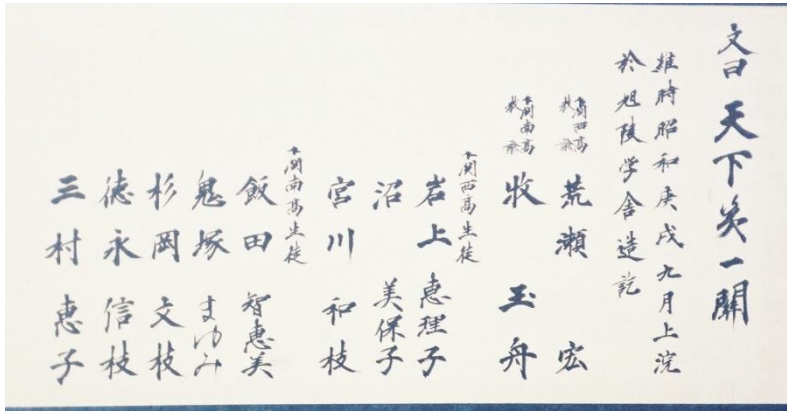
次も牧先生談を元にしてている。

これ以降「天下第一關」は校内から姿を消したが、「昭和四十五年傷んだ天下第一關を修復したいとの声があがってきた。当時の書道の荒瀬(木島)宏教諭は『原作は牧先生ということなので、牧先生にお願いしたい』ということで、私(牧先生、昭和三十九年に下関南高校に転勤されていた)と荒瀬先生と両校の書道部の生徒たちで以前(昭和三十四年)と同様な方法で夏休み中に作成した。また、修復してもまた破られる恐れもあるので屏風仕立とした。」

入学式、卒業式等で飾られる屏風(昭和庚戌 四十五年、一九六九年)がこのときできあがったものである。



牧先生と屏風



屏風作成者(屏風の裏面)

### (五) 転勤・同窓会校内幹事、修復、展示

昭和六十三年四月に母校下西に赴任して一年後の2年目に校内の旭陵同窓会の係「校内幹事」の役を伊藤眞喜男教諭(旭陵三十九期)より突然引き継ぐことになった。伊藤教諭がその前年に数学の中山允仁教諭(旭陵三十期)から引き継いだ役であった。3月末に伊藤教諭に呼ばれて、田部高校に転勤になったので後を引き継いで欲しい。いろいろな人と付き合うのが好きみたいだから、お兄さんと同期だった縁もあるからと妙なところで兄の名前が出てきたので少し面白くなかったけれど、やむなく引き受けることになった。引き受けざるを得なかったというのが実感だろうか。同時に同窓会の役員の方達はなかなか手強いから気をつけないと、随分苦労されたように言われたのをよく覚えている。そんな役をやらないといけないのかと何となく晴れぬ気持ちだったけれど、私は私流にやっていくしかないと思った。実際には役員の方達とは楽しくさまざまな仕事も各支部への旅行なども随分助けていただいた。まだ、父(大場三郎)の教え子の方達も沢山居られて「カメの息子か!」と声もかけていただいたので感謝している。でも中には殴られたと恨みがましく言う先輩も居られたので「それは、すみません」と笑顔で答えるが内心は自分が悪いことをしたのだろうに思ったりもしたものだ。

資料は図書館の中に同窓会の部屋がありそこにほとんどの資料が入っている。そして、雨天体操場の2階の旧講堂(体育館のない時代は入学式や卒業式、それに生徒会総会の会場としても使われていたが、体育館が旧卓球場跡(ここも元は武道場であった)に建てられてからは卓球場として使われていた。)の奥の舞台の後ろの扉の中に資料があるからと教えられた。

図書館の資料室には雑多にいろいろなものが放り込まれている感じだった。十数年分の同窓会誌が山と積まれていた。一方の卓球場奥の大きな扉は何のためにこのような物があるのか随分長い間、私のなかでは謎のままであったが、長い年月の末戦前昭和5年の建築であれば恐らく「奉安殿」に違いないと思うようになった。あるとき体育の中澤清祐先生(旭陵二十一期)にお伺いしたところ「うん、奉安殿があつてご真影がかけられていた」とのことで、長い間の疑問がようやく解決できた次第である。

### (六) 扁額との出会い 平成3年(1991年)11月18日 奉安殿の扉を開く

校内幹事を引き継いだものの二年目は二年の担任、続いて三年の担任を連続と多忙な日々が続く、気にはなりながらも反面何か変なものでも出てきたら困るなどの思いもあり旧講堂の扉を開



けることができなかった。平成三年十一月にこのまま開けずに年を越してはまずいと思って旧講堂の舞台奥旧奉安殿に懸かっていた南京錠は大人の握りこぶしくらいに大きくなかば錆び付いてもいた。この錠を外し一枚の高さが三メートルはある数枚の観音開きになっている扉を思い切って開けてみると、奥行きは一メートル程度の中に、およそ縦一・五メートル横四メートルもある長い板状のもの裏側があり、表を見ると全体は埃にまみれ紙はあちらこちら破れて垂れ下がり所々朱で落書きされた無残な状態の「天下第一關」を発見したのであった。これが「天下第一關」との最初の出会いであった。私は、これぞ本校に伝わる原本だと信じ込んで感動したことを覚えている。(その後、昭和三十四年作成のものともわかった)、

## (七) 修復 役員会に提案 12月12日

西高にとって記念すべきものなので、是非修復して後世に伝え残すべきだと考え、私の興奮の冷めやらぬうちの12月12日の同窓会の役員会に提案し、協議の結果扁額に修復して再度掲額することになった。開校七十周年(平成元年)の記念行事は女優中村メイコ氏の講演で終わっていたので、時期としては少し遅いが本校創立七十周年(平成元年)の記念事業の一環として実施することになった。

同時に体育大会の各部対抗リレーの優勝旗もボロボロになっており行進中に破れた布きれが散って落ちる程傷んでいたもので、この機会に新しく作成して寄贈することになった。

さて、このように大きいものを補修し表装してくれる店などあるのか、どこに依頼したらよいものか、掛け軸などの表装をする店は市内でも見かけるがどこの店ならこれだけ大きいものが扱えるのか見当がつかない。市内の硯山(書道具店)に問い合わせたところ10万円程度とのことだった。そこで日本史の利岡俊昭教諭(三十一期)にお聞きすると、このように大きい物になると県内の文化財の修理や表装等を一手に引き受けている美術表具処三輪雲輪軒(創業文久三年、長門市仙崎町)がいいだろうということで、すぐに連絡し、鑑定していただいた結果、書かれている紙の質もよくないうえに破損し朱墨で汚されていたので、このままの修復は難しく、朱墨は洗い落とし文字だけを切り抜き上質の和紙に貼り付ける方法がいいだろうということになった。これまでのように地のままでは傷むので、扁額の表面は全体の軽量化と安全面からアクリル板とし裏地には内部が結露したり湿気がこもったりしないよう絹布を張り、文字の周囲は金箔を押し枠は台湾桧に漆をかけたもので全体的に重厚感があり、実質重量もおよそ百キロもあるものに仕上がっている。諸経費は百十三万円ほどであったが、財政的には余裕があるからと実現できた。しかし、考えてみると破損したものの欠損はなかったようで、これは幸いだった。

四月十八日に三輪雲輪軒に正式に依頼すると、すぐにとりに来られし、六月十八日には修復なった扁額を玄関ホールに掲げることができた。こうして、昭和四十一年(一九六六年)の九月に破損のため旧奉安殿内に収納されて見るができなかった「天下第一關」が、実に二十五年ぶりに再び掲げられいつでも見るできるようになったわけである。早速見に来られた書家でもある亀田五郎同窓会長(十一期)が「五つの文字どれも素晴らしいが、特に『一』の字が素晴らしい」との感想を述べられた。

掲額の場所については、ともかく大きいので、体育館、職員室の廊下の壁、本館一階のホールなどが候補として考えられたが、目立つところで傷つけられにくいところということで本館一階のホールの壁に掛けることに決まった。



玄関ホールに掲額された「天下第一關」



設置の様子

私はこのような歴史的物事に対しては、当然説明文が必要だと考えていた。ただ現時点で解説できる内容は限られており、分らないことも多いが、解明できていない部分はこれから調べていくことにして、現在把握している内容を整理したものが最初の説明文プレートである。これも同窓会の寄贈である。もう少し調べて、より正確な私自身納得のいく内容の整理ができた段階でまたは他の人がよりよい説明ができればそのときに説明文は差し替えればいいと考えた。

旭陵の同窓会誌の最初のページには「天下第一關」の扁額の写真が掲載されるようになった。



「天下第一關」の前で牧先生と私

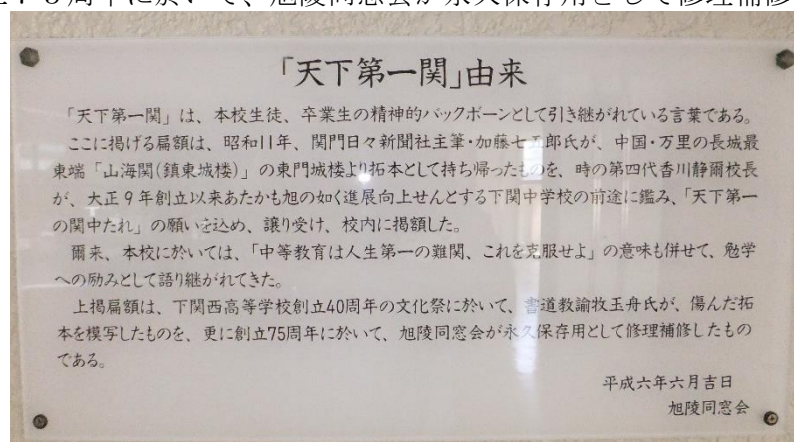
結局、平成六年六月に簡単な説明文のプレートを設置することができた。ただし、創立七十五年になっていたので、「創立七十五周年記念とする表記になった。」

## 「天下第一關」由来

「天下第一關」は、本校生徒、卒業生の精神的バックボーンとして引き継がれている言葉である。

ここに掲げる扁額は、昭和11年、関門日日新聞社主筆・加藤七五郎氏が、中国・万里の長城東端「山海関(鎮東城楼)」の東門城楼より拓本として持ち帰ったものを、時の第四代香川静爾校長が、大正9年創立以来あたかも旭の如く進展向上せんとする下関中学校の前途に鑑み、「天下第一の関中たれ」の願いを込め、譲り受け、校内に掲額した。

爾来扁額は、下関西高等学校創立40周年の文化祭に於いて、書道教諭牧玉舟氏が、傷んだ拓本を模写したものを、更に創立75周年に於いて、旭陵同窓会が永久保存用として修理補修したものである。



## (八) 「天下第一關」についての疑問と考察

西高に再び「天下第一關」の扁額が昭和四十一年八月以来掲げられることになったが、恥ずかしいながら「天下第一關」についてはほとんど何も知らなかったし、在学中にも説明してもらった記憶がない。ぼんやり者の私のことだから聞き逃していたのに違いないだろうが、そういえば生徒総会などで退出するときに、入り口の上に見たような気がする程度である。遅ればせながら勉強しなければならない必要性に迫られたことになった。

香川校長の説明文を読んだときの疑問点は

- 一 「楼門上」とあるが、そんな高いところの拓本がとれるのか
- 二 「楼門上」なので木製なのに、どのような方法で拓本をとったのか
- 三 中国は書の国。いつ頃、誰の書なのか。掲げられた経緯は。

の三点であった。

以下、知り得た情報の順を追ってたどってみることにする。

### 一 楼門上に掛る扁額

この「天下第一關」は、万里の長城の最東端にある「山海関」という方形の城郭に東西南北の城門があり、そのうちの東門城楼（鎮東城楼）に掲げられている扁額の拓本であると伝えられてきたが、歴史的建造物である高楼（地上二十メートル）に掲げられた木製の扁額の拓本を直接採ることは決して容易ではない。拓本をとるには楼門上の回廊に扁額の高さまで足場を組み、数人で各文字にあてがった紙を風に動かされないよう押さえつけて文字の形をえどらなければならない。海岸に真近で四六時中風が吹いているであろうこの地で無風状態の時でなければ困難を極めるに違いない。一文字だけでも大変なのに五文字を一度に写し取るなどはほとんど無理であり、これをお土産にして売るとなればかなりの高額にしなければ割が合わず、お土産として売るのは難しいだろう。また、拓本といえば、一般的に本体（一般的には石材）に墨を塗って白紙を押し付けバレンでたたいてとる方法しか思いつかなかったので、彫ってある文字の部分は当然白く残るはずなのにこの拓本はどうして白文になっていないのかということが不思議でならなかった。

ともかく、最も手近な本校の図書館を探してみると

「万里の長城 河出書房新社 P124」に

『山海関は過去5世紀を通じて、商業の中心としてもかなりの役割をはたしてきた。ここにあるすべての物が—ひとりの貧書生が一四七二年に書いたといわれる城楼の大扁額までが—歴史を物語っている。』

と出ている。中国は言うまでもなく「書」の国であるからには一体誰の書なのか非常に興味あるところであるが、末代まで残るような楼門上の扁額を貧書生が書いて掲げたなどという事は到底信じがたい話である。ましてやそこら当たりには「貧書生」に、仮にこの近辺で書家として認められていてもである。

納得できないままに温めておくことになったが、書かれた年代だけは知ることができた。

では、「天下第一關」と命名し扁額を掲げよと命じたのは一体誰なのか、どのような経緯で扁額が掲げられることになったかは、この本では明らかにされていない。

書店でも探して

中国歴史の旅 上 陳舜臣 著 毎日新聞社刊 P 72

現在、河北省と遼東省の省境にある山海関は、「天下第一関」の扁額をかかげ、万里の長城の東端と思われがちです。けれども、その扁額は明の蕭頭(しょうけん)の書を模したもので、城門も明初の建造でした。秦の長城も、それ以前の燕の長城も、山海関より数百キロも北、そしてはるか東の遼東までのびていたのです。最近、東北の各地に、古代の長城跡が発見されたというニュースがありました。

これにより、書は明の蕭頭(しょうけん)の筆に依ることは判明した。(中華人民共和国になり略字の標記になっているが、ここでは本来の蕭頭を原則として使用することにする)

「一」の疑問に対しては、藤本正三氏(三十五期)より同期の十五名と山海関を訪問されたとき、山海関の東六、五キロの地にある「孟姜女廟」の東側の壁には“天下第一関”と刻まれた石刻があり、その文字の大きさは山海関のものと同じということであったので、石刻からの拓本であれば納得できる。

「二」については牧先生からのお話しのとき(平成四年八月)、

通常「拓本」といえば元が石刻であれば墨を塗ってその上から白紙を押し当ててとるものであるから当然黒地に白字となるのに、どうして普通に書いたように黒字になっているのかずっと疑問に思っていたので、そのことをお聞きしたところ

「紙をあてて彫ってある字の通りに縁どりした後に内部を墨で塗る蝉翼(せんよく)拓本という技法がある」と教えていただいた。

しかし、牧先生のお話では、石谷事務長から切れ端を見せてもらった原拓本は黒地に白文字になっていたということで、これなら確かに『拓本』であることが判明したことになる。こうなると楼門上の木製からの拓本とは考えにくい。この後すぐ、当時の藤本事務長に金庫の中を探していただいたが、ひとかけらも残っていなかった。

結論として、最初に持ち帰られた拓本が、「竪六尺横二十一尺の大額」で通常の拓本で黒地に白字となれば、孟姜女廟の石刻からの拓本と考えるのが妥当と思われる。

平成六年旭陵同窓会誌に「天下第一関について」が掲載される。当番幹事の求めに応じて私が書いたものであるが、これが戦後初めての記述と思われる。(大場仁史文)

(これ以外に「天下第一関」について書かれたものはないと思う。)

その後、平成六年の夏期休業中に本校の英語教諭好川眞知子先生(中国語も堪能)が中国旅行され山海関に行かれるとのこと、少し離れたところに孟姜女廟がありそこには石刻の「天下第一関」があるそうですとお話ししたが、「多分そこまでは行かないでしょう」とのことだったけれど、帰国されて話されるには、山海関から孟姜女廟に足を延ばされたとのこと、しかも有り難いことに石刻の写真をいただいた。また、お土産に天下第一関の筆者「蕭頭」にかかわる本もいただき

当時大阪大学在学中の中邑陽子さん(六十九期)に訳してもらった。

平成六年

1991年(平成3年)11月23日発行

サンデー毎日別冊 万里の長城 幻の西端を求めて 矢口篤雄

に、山海関の「天下第一関」が大きく撮られている。しかし、孟姜女廟の石刻は載っていないので、万里の長城を最東端から最西端までの写真を撮られているのならひょっとして孟姜女廟の石刻の写真を撮られているかもしれないと思い、問い合わせたが「撮ってない」との回答。参考にと「天下第一関」の写真のネガと海上の「孟姜女の墓」といわれている奇岩の写真を送っていただき、このときの「天下第一関」の写真は許可を得てこの年の同窓会誌に掲載した。

これを機に、旭陵同窓会誌の「天下第一関の写真」は送っていただいたものを平成十一年まで使用している。平成十二年版からは、著作権の問題も考慮して八十周年ツアーで私が撮影した写真に変更されている(はずである)。

この年の旭陵祭では矢口篤雄氏より、サンデー毎日に掲載されている写真の中から選択したパネルをお借りして展示したが、あまり見てはもらえなかった。このうちの三展を購入(三万円)し、図書館に展示してある。

平成七年二月山西さん(三十九期)から小包が届けられた。勿論存じ上げないお名前なので不審に思いながら(この当時小包を利用した爆発物の事件がよく起っていた)振ってみるとカラカラと音がする。恐る恐る小包を開くとお手紙と「蕭頭」の像の写真、タバコ「天下第一関」をいただいた。前年(平成六年)の旭陵同窓会誌「天下第一関」の由来について書いた私の文(香川校長の「憶い出」以後、初めてと思われる)が記憶にあり、同年商用で山海関近くまで行かれたついでに少し足を延ばして山海関に行かれ、「蕭頭」の像とプレートを見つけられて撮影されたとのことだった。これによって作者は判明した。

年が明けて、訳文が届いた。

この本により扁額は明代9代.憲宗成化帝(朱見深 在位 1464年 -1487年)が1472年に下した勅命により作成されたことが明かになった。この本により、「天下第一関」の扁額が「蕭頭」の手になること、扁額を書くに当たっての経過と苦勞、逸話が書かれていて興味深い。特に「一」の字は単純であるが故に画数の多い字の中にあって悩まされたことは興味深かった。



好川先生よりいただいた石刻の「天下第一関」

本校にもたらされた扁額と比較してみると「一」の字の位置が上下真ん中に近く、このほうがバランスがとれている。最初の拓本も八十周年ツアーで入手したものと同様に一字ずつの拓本をとりつなぎ合わせたものと考えられる。つなぎ合わせたときに「一」の字が少し上になったまま張り合わされたのではないだろうか。正直な感想として、破損した「天下第一關」と対面したときに「一」の字が少し上過ぎると思った。

### (七) 「天下第一關」本物の拓本の入手とその後の行方

平成十一年創立八十周年を記念して実施された同窓会主催の「天下第一關ツアー」に参加するに当たって、この際何とかもう一度拓本を手に入れることはできないかと発案し、石原同窓会幹事長(三十五期)を通じて、この旅行を請け負われたウイングエアサービス株式会社代表大崎祐司氏(三十二期)にお願いし、中国政府に働きかけ許可を得て幸運なことに、この拓本を持ち帰ることができた。きわめて特例という事であった。ただし、条件として秦皇島市山海関第一中学(日本の高校に当たる)教員との交流会と夕食会を開くことが付帯され、その交流会の席で拓本が披露され贈与された。

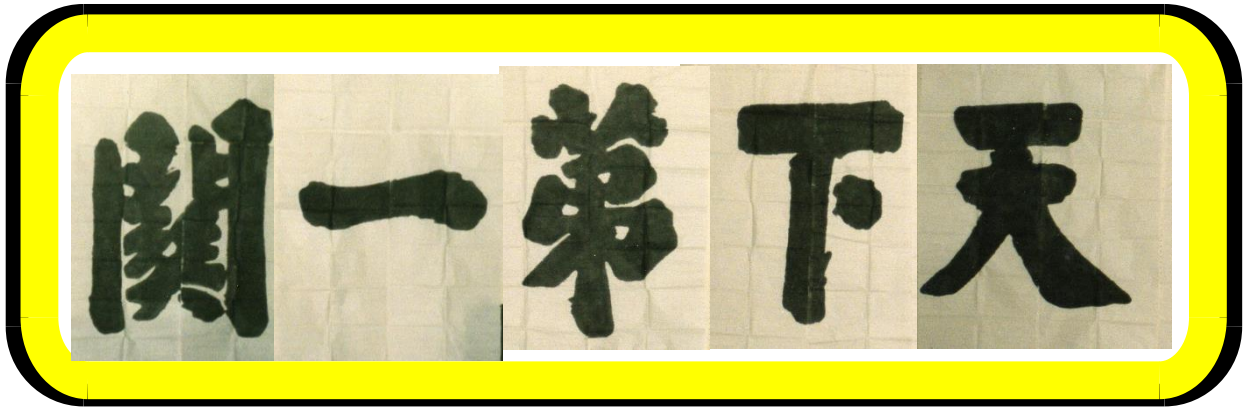
余談であるが、山海関に貸切バスで入ろうとしたときに、交通規制に引っかかってしまった。政府の要人が避暑に来るとのことではいつ解除されるか不明という。このままバスに閉じ込められたままになるのかと肝が冷えたけれど、すぐに大崎さんが関係者と掛け合わせ、我々は日中友好の団体であると素早く交渉されて無事通過することができた。「天下第一關」の拓本をいただくことに関する行事が幸いしたのかもしれない。

廟にある石碑の天下第一關は、現在は手前にガラスがはめ込まれていて触れることはできない状況での拓本の採取で、これは牧先生の言われた「蟬翼拓本」でかすかに鉛筆書きの跡が残っていたように感じられた。



秦皇島市山海関第一中学(高校)(中国河北省重点高等中学の一つ、山海関長城の一角にある)での引き渡し式の様子。当日は八月末ではあったが、既に授業が開始されていた。

贈与された拓本は、私が保管し西高に持ち帰るよう幹事長より指示された。翌朝ホテルの自室で一枚ずつ(一文字の紙の大きさは縦横が一、五メートル程度ある)撮影し、合成したものを。



「扁額」仕様にしてみました

帰国後、同窓会に保管を依頼し、「永久保存」と念を押しておいたけれど、数年後資料室を訪ねてみたときには、所在不明であった。経緯は不明。

従って、これがツアーから持ち帰った唯一の記録である。至極無念である。その後、布製の天下第一関が創られていたが、もしかするとそのときの原盤として利用し、その後破棄されたのではないだろうか、と推測している。

八十周年記念に、日程の都合で「孟姜女廟の石刻」を見に行けなかったことが悔やまれる。また、山海関を案内の女性ガイドに「扁額の一つが日本軍が持ち帰った」とすごい口調で言われた。ガイドブックにもはっきり書いてあるが、現実には靖国神宮の遊就館には展示されていないのは確認済みである。

その後、いろいろな方からいただいた資料、また実際に山海関に行って得られた知識等をもとに、私は学校と旭陵同窓会の了解を得て平成二十七年(二〇一六年)二月末に新しい説明文プレートを個人で寄贈、付け替えることができ、なんとか宿願を達成した思いである。「長い」と言われるのは覚悟していたが、いくら推敲しても私の非才ではこれ以上短くすることはできなかった。

#### (八) 終りに

扁額「天下第一関」と私との出会いは、開かずの旧奉安殿を開いたときに始まる。もし、開け



ていなければ、旧体の解体とともに消えていたであろうし、強く要望しなければ埃を被ったまま放置されていたかもしれないし、中国政府に掛け合ってもらっていなければ本物の拓本も入手できなかったかもしれない。全ては巡り合わせなのだろう。「天下第一關」についてもまだここでは十分に説明できていないことも多いし、分っていないことも多いので、「私にとっての旭陵百一年誌」の作成とともにもう少し勉強し、整理したいと考えている。このような発表の機会を設けて下さった六十八期の皆さんに大感謝です。

## 資料 1 誰が書いたか？

「天下第一關」の額は山海関に五つあり、一つは石質、四つは木製である。石質の額は孟姜女の廟の前殿内の東側の壁にはめこまれている。四つの木製のうち三つは山海関の東門城楼の一階と二階の内と外にかけてあり、残りの一つは区の文化会館によって近年模倣して彫られたもので「山海関の長城博物館」内の長城文化ホールに陳列されている。「天下第一關」の額は横五、八m縦一、五五mでそこには「天下第一關」の五つの大文字が陽刻されている。そのうち「一」の字は一、〇9m繁体字の「關」は縦一、四五mである。「一」の字は一画でも単調でやせた感じはなく、「關」の字は画数が多すぎても動きが鈍い感じはない。「天下第一關」の五つの大文字はどの字もそれぞれの文字の結びつきに工夫が凝らされており、配置、構成が適格で筆力は重厚味をおび、山海関の地形にまさにふさわしい出来ばえであり大いに関所を鎮める風格をそなえ、山海関という関所に威厳と輝きを添えるばかりか、関所としての戦略的地理を示すものである。

城楼にある三つの木製のものの二つは後世に模倣して彫られたものである。一つは清代光緒五年(1879年)王治の作であり、二階の外に掲げてあるのは民国九年(1920年)楊宝清の作である。

彫られたものにはもともと落款があったが、後にペンキで塗りつぶされた。もとの額が誰に書かれたか長い間諸説入り乱れて定かではない。史料の中で調べられるものは光緒四年(1878年)編纂の「臨榆県誌：設置編・城壁と壕の巻」で、そこに次のように記してある。

「『天下第一關』は明代の事務官簫頭の書いたものと伝えられる。」

民国九年(1920年)臨榆県知事の周嘉探は「天下第一旧額修理記録」の中で次のように述べている。「天下第一關は筆力重厚でまさに山海関の地形に似つかわしくシン分宜(シン嵩)の筆跡とされる」が、現在では簫頭の書いたものとする傾向にある。

また、伍ソウ徳創刊の「良友画報」の1933年第七四期には次のようにある。

「日本軍が正月一日飛行機と大砲で山海関を砲撃した。天下第一關として知られる山海関は二日もせず陥落した。『天下第一關』の額はすでに日本軍国主義の戦利品として東京に運ばれ九段の『游就館』に陳列された。」

かくして、又新たに一つの額が出現したのである。

現在一部の学者達が「天下第一關」はいつ誰が書いたのか、もとの額はどこにあるのか等の課題を現在研究中であり、恐らく新しい発見がなされるにちがいない。

註 この文により、靖国神社の「游就館」に額の存在を問い合わせたけれど存在していない。また、存在した記録も見当たらないとのことだった。

また、八十周年ツアーのときの女性のガイドからも同様なことを言われて責められた。

## 資料2 蕭顛について

「蕭顛」略歴

35歳で科挙に合格して進士に及第したことからもわかるように、元は文官であった。福建地方の地方官として勤務していた頃から軍事について論じるのを好んだという逸話から、仕官した時点ですでに軍事に関心をもっていたと思われる。引退後は故郷の山海関に住んだという。

成化帝の勅命により「天下第一關」の扁額が掲げられることになったとき、すでに蕭顛が官を辞していたとすれば、蕭顛はかなりの歳で進士に合格し在任期間もそれほど長くはないことになる。また、勅命を下したのは北方北民族の侵入を防ぐ要衝の地と認識し、必ず死守せよという願いがあったからであろう。事実、この山海関は攻略されたことはない。明末の動乱の折に政争に嫌気がさした当時の守将呉三桂が満州族の軍に門を開き清の建国につながった。

また、このような軍事上重要な楼門にどうしてこのような扁額がかけられるようになったのかも疑問に思っていたが、「明代9.憲宗成化帝は（朱見深 在位 1464年 - 1487年）正統帝の子。正統帝は中国王朝で唯一異民族に捕虜にされた皇帝で、捕虜にされたときに廃帝、その後帰国し数年後に反乱を起こして復位。跡を継いだ成化帝は、山海関の重要性を痛感していたのではないか。

また、ガイドブックには「扁額の一つが日本軍に持ち去られ、靖国神社の遊就館に展示されている」と書かれていた。そんなこともあったかもしれないと思いつつも、靖国神社の遊就館に電話で問い合わせたところ数日して、該当するものはないとのことであった。後年、実際に行ってみたがやはりなかったの、持ち帰ったというのは間違いか、途中で紛失したか、または奪い返したのか、あるいは靖国神社以外のどこかに保存されているのかであろうと推測するが事実は不明である。

しかし、これが真実であればこれだけ大きいものを持ち帰るのは大変だし、持ち帰っていたとすれば必ず記録されていると思われる。記録がないということは、例えば拓本程度のものが持ち去られたということではないだろうか。ひょっとしたら西高にもたらされた拓本がそれだったりして・・・。

## 資料3 「一」の字について

「およそ山海関に遊びに行った人は皆誰も東門城楼に高く掲げてある『天下第一關』の巨額をみて、よく書けている、『關』の字画は多いのに繁雑な感じもなく、『一』の字画は少ないのに単調な感じもないと絶賛するのである。

この額は五百年前の明代、山海関出身の蕭顛が書いたものである。蕭顛は成化八年(1471年)の進士(35歳で合格)で著名な書道家である。しかし、蕭顛はこの額に自分の名を書き入れていない。

何故なのだろう。

伝えられるところでは、蕭顛は筆を取り上げ『天下第一關』の大文字を一気書き上げたもののじっとながめてみると『一』の字が『關』の字にくっついて、『關』の字画が多く『一』の字画が少ないので釣り合いがとれない。彼はさっそく一の字だけをたくさん書いてみたが、どの字もひ

とつとして彼を満足させるものはなかった。簫頭は筆を置き歴代書家の書いた『一』の字に目を通し数多くの書の手本をひもとき、何日も何日も練習にあけくれたがやはり満足がいかない。

ある日、簫頭は城下のある店に一杯飲みに行った。ここは彼が常日頃酒を飲みにくる店である。給仕とは互によく知りあった間柄である。彼が飲みにやってくるたびいつも給仕は肩の上一本の手ぬぐいをのせていて、彼が腰をおろすと給仕はいつもにっこりしと笑って『やあ簫さん』と声をかける。そうしながら肩の手ぬぐいをとってテーブルの上を左から右へさっとふくのである。かつては給仕のこの動作は見慣れていたので何も感じなかった。今日給仕が左から右へさっとテーブルをぬぐうと、簫頭は『あっ』と声を上げぼつと立ち上がり、手で給仕の手をぐっとおさえ何度も次のように言った。『動くな、動くな。いいぞ。いいぞ』。簫頭のこの様子に給仕はあつけにとられた。『簫先生、どこか悪いの』。なんと給仕が手ぬぐいでテーブルの上を左から右へさっとぬぐうと、その上に一筋の水の紋様があらわれ、この紋様こそまさしく簫頭が書きたくても書けず、求めても求めえなかった『一』の字であった。簫頭は気にかかっていたこのことを給仕に打ち明けるや二人とも大声で笑いだした。それから、簫頭は注意深く給仕が手ぬぐいでえがきだした『一』の字を手本にして書きとり、額にかいてようやく満足したのである。

額を書き終わって簫頭に名前を書かせようとしたところ、簫頭は言った。『書けません。この額を書けたのは私一人だけではなく周囲の者の手助けもあったのです。どうして私一人の名を書くことができますでしょうか。』

そういうわけで、今日になってもこの素晴らしい額に簫頭の名前を見受けることはできないのである。

註 簫頭の書の素晴らしさとともにこの書を揮毫した人物の人柄を表すことにより一層の輝きを増すように創られている。中国には甘肅省嘉峪関市にある「嘉峪関」、甘肅省敦（火皇）県西北部にある「玉門関」、山西省平定県にある「娘子関」等有名な「関」が幾つもあるが、それらのいずれにも揮毫者の名前は記されていないので、名前がないのが当然かもしれない。

しかも、現代でもこのような評価を受けていることは予想もできないほどの驚きだった。

従って現在楼門上に掲げられているものは簫頭が書いたものが長い間の風雨で傷んでは新たに書き換えられ複製されたものが掲げ続けられたということになる。事実楼門階下の展示室には古くなった三枚の扁額が残されているが、それ相応にどれも傷んでおり、どれが簫頭のものかは不明である。さらに孟姜女廟の石刻がいつ作成されたかはまだ定かではないが、正確にとるには石刻のほうが適切と思われる。



### 資料3 山海関

この地域は周の時代には燕の地であり、秦、漢時代には遼西郡に属した。背後の燕山が渤海に迫る狭隘なこの地区は、満州方面から中原に向かう軍は必ず通らなくてはならない交通の要所

で、いわゆる「兵家必争之地」であった。満州の女真に対する防備の要衝であったため古代から城壁が築かれ、漢代は既に臨榆関と称されていた。隋や唐時代にも長城の一部として拡張が重ねられ、現在も当時の城壁が残る。明代の洪武十四年（1381年）、將軍の徐達が整備を行い、山と海の間にあることから山海衛と命名して永平府の管轄とし、後に山海関と称されるようになった。清代以降は行政区画名は臨榆県と改称されたが、現代では山海関の名称が行政区画名となり現在に至る。

## 資料4 孟姜女について

孟姜女廟 / MengJiangNuMiao / モンジャンニューミャオ

孟姜女廟は、中国の有名な四大民間故事（梁山泊と祝英台、白蛇伝、牛郎織女、孟姜女）の一つである孟姜女が祭られた廟であり、「孟姜女が冬着を送って長城を泣き倒す」の故事に基づいている。この故事については、2012年(平成24年)4月24日第1刷発行「なみだでくずれた万里の長城—中国の民話」として岩波書店から刊行されている。発行後すぐに発注して読んだ。その後、西高にも寄贈しようと書店に注文したところ、岩波書店から最後の1冊だと言われたという。内容から推察して再版はないだろうとの話だった。



### 中国歴史の旅 上 陳舜臣 著 毎日新聞社刊 P57

万里の長城の築造のかげには、人民の血と涙と汗があります。おびたしい生命が奪われたことでしょう。それはかずかずの悲劇をうみました。そのなかで最も人びとに知られているのは「孟姜女(もうきょうじょ)」の伝説です。

孟姜女は范杞梁(はんきりょう)の妻でした。齊(せい)の国の人ということですから、いまの山東省に住んでいたのです。范杞梁は徴用されて、長城築造に連れて行かれました。八達嶺よりさらに百数十キロも北ですから、冬になると寒さがはげしいのはいうまでもありません。孟姜女は夫の身を案じ、「寒衣」すなわち防寒用の衣服をつくり、それを届けるために旅立ちました。齊から燕の北へ、それは長い旅です。しかも女性の身ですから、艱難辛苦の旅だったのはいうまでもありません。やっと彼女は工事場に着きましたが、なんと彼女の夫はすでに死んでいたのです。彼女は城壁の下で慟哭しました。すると、ふしぎや高い城壁がみるみる崩れ、そこから夫の遺骸があらわれたという物語です。

孟姜女の伝説はいろいろあって、細部については異同がすくなくありません。この物語は芝居になったり歌曲になったりして、おおぜいの人を感動させたものです。夫を失った妻の涙が、城を崩壊させたという話は、古く春秋時代からあったようですが、孟姜女の伝説はそれに長城築造という人びとを苦しめた大工事からなっていて、一般の人びとの胸に、とくべつ強く訴えるものがあつたのでしょう。

敦煌出土の曲子詞集のなかにも「孟姜女」がありますから、すでに唐代でもこの物語がさかんに歌われ、また舞台上で演じられていたことがわかります。

孟姜女は一人ではなかったのです。長城築城は、何百、何千もの孟姜女をつくりだしたにちが

いありません。また後世でも似たような境遇の人がすくなくなかったので、それにかんする戯曲や歌曲がうけつがれたのでしょう。孟姜女の嘆きは、圧政にたいする怨嗟にほかなりません。

### 孟姜女廟

山海関城の東 6.5 キロにある廟。宋代の創建で、  
その後明代の万暦年間 在位期間 隆慶 6 年 6 月 10 日 - 万暦 48 年 7 月 20 日  
(1572 年 7 月 19 日 - 1620 年 8 月 18 日)  
崇禎年間、 在位期間 天啓 7 年 8 月 24 日 - 崇禎 17 年 3 月 19 日  
(1627 年 10 月 2 日 - 1644 年 4 月 25 日) に整備された。  
民国 17 年にも修築がなされた。

廟前にある 108 段の石段を登っていくと孟姜女廟の山門に着く。廟内には、鐘楼、前殿、後殿、望夫石、振衣亭などがある。

鐘楼は山門を入れて右側にある。鐘には銘文や寄付者の姓名、八卦図が鑄られている。この廟の主殿である前殿には孟姜女の像が置かれている。東側の壁には“天下第一関”と刻まれた石刻があり、その文字や額の大きさは山海関城のものと同じだ。西側の壁にかかる石刻には、清の歴代皇帝らの直筆の詩が刻まれている。

前殿の後ろには“望夫石”がある。孟姜女がこの石に登り、離れた場所にいる夫を想ったと伝えられている。また、この奥には“梳妝台”と“振衣亭”がある。孟姜女が夫に会う前に髪を梳いたり、着替えをして身支度をした場所とされている。沖に奇岩が屹っており、これが孟姜女の墓であるという。

